

坂井氏はテュルク語系諸族の英雄叙事詩のなかでも広く流布している「ノガイ大系」の語り手ないしは創作者を突きとめることを意図した。カザフスタン西部では十五〜十七世紀に著名な詩人「ジュラウ」が輩出した。アサン・カイグ、スプラ・ジュラウ、ドスマンベト・ジュラウ、シャルキイズ・ジュラウなどという詩人の事跡を辿ると、当時のキプチャク草原の大地と社会状況が「ノガイ大系」という一連の叙事詩に投影されていることが明らかになる。また、今日では、伝統的スタイルの語り手はほとんど存在しないが、叙事詩については音楽大学で若手への教育が進められており、一方では新生国家の国づくりのシンボルとして政治的に利用されている側面もある。

今回のシンポジウムにおいても、歴史的、文化的背景を異にする地域のフィールドから現状に即した貴重な情報が提供された。それぞれの報告には今後検討に値する共通の問題のヒントが多々ある。いずれ、そのような問題を共通の俎上に上げて、検討できることを期待したい。

(おぎはら・しんこ／千葉大学)

国際口承文芸学会

第十四回世界大会報告

加藤 耕義

二〇〇五年七月二十六日から三十一日までの六日間にわたり、国際口承文芸学会 (SENZ) 世界大会が、エストニアのタルトゥで開催された。大会にはおよそ二五〇名の参加者、二二〇の発表があり、大きな大会となった。

タルトゥは、人口一〇万人ほどの静かな大学町であるが、エストニアでは首都タリンに次いで二番目に大きな町である。タルトゥ大学では民俗学の講座が一九一九年に開かれ、一九二五年には大学民俗学会が、一九二七年には資料館が、一九四七年には民俗学学科が設立されている。

私はこの大会に参加するのは初めてであったが、大会全体がとても友好的な雰囲気包まれていたのが印象的であった。世界各地から集まった研究者がそれぞれの発表に対し、批判的に討議するのではなく、深い興味を持って耳をかたむけ、さかんに意見が交わされていたことは、この学会の特筆すべき点と感じた。

初日、受付では、国際口承文芸学会のマークが印刷された黒

のシヨルダーバッグが参加者全員に配られた。中には、二二五ページにおよぶ今大会のプログラムと発表要旨集、タルトゥ大学刊行の『エストニア民俗学および民族学諸研究』という三七〇ページにおよぶ論文集、エストニア・インステイトゥート刊『エストニアの歴史』という写真集と現在のエストニアについて書かれたパンフレット、タルトゥの地図、食券、そして国際口承文芸学会のマーク入りボールペンが収められていた。

第十四回大会の総合テーマは「民間口承文芸の理論と現状 (Folk Narrative Theories and Contemporary Practices)」であった。これは、過去数十年にわたる多様な口承文芸研究と、ここ十年ほど特に注目を集めているインターネットやメディアを通じたコミュニケーションと伝承の関係までを視野に入れた総合テーマである。

毎日のプログラムは、午前九時から全体会が二時間行われ、途中一時間半の昼休みと三〇分のコーヒープレイクを二度はさんで、午後六時半まで八会場に分かれて分科会の発表があった。分科会は二十五テーマに分けられていた。またワークショップもふたつ開かれた。また会場を別にして、初日の夜には、エストニアのフォーク・グループによる演奏、およびオープンングレセプションが催された。二日目の晩には、エストニアのストーリーテリング、三日目の晩には、エストニアの伝統的な教会の合唱が教会にて文化プログラムとして行われた。四日目は、四コースにわかかれてのバスツアー、五日目の晩には懇親会があり、

参加者の親睦が図られた。

さて、本題の学会内容を示すため、少し長くなるが、全体会の発表者および発表タイトルと各分科会のテーマを記しておく。今大会のおおよその傾向が見えると思う。

◎全体会

・〔開会記念講演〕テリー・ガネル (アイスランド) 「口承文芸と空間」

・ダン・ベネイモス (アメリカ) 「口承文芸—口承文芸は何の役にたつか、なぜ我々は口承文芸を語り続けるのか」

・エミリー・ライル (イギリス) 「口承文芸のテーマと神話の構造」

・サダーナ・ネイタニ (インド) 「民間伝承におけるポスト・モダンとポスト・コロニアル」

・チャールズ・ブリッグズ (アメリカ) 「伝統の伝播性—曖昧な諸想像における口承文芸と力」

・アルヴォ・クリクマン (エストニア) 「ユーモアに見る現代言語理論」

・カール・リンダール (アメリカ) 「恐怖の利用 演じられ、再構築され、記憶されたアラチアのメルヒェン」

・サトゥー・アポ (フィンランド) 「口承と書承の関係、メルヒェン研究における試みとして」

◎分科会

- ・口承ジャンル ― 継続と変化（発表者十六名）
- ・口承ジャンル ― 昔話（発表者二〇名）
- ・口承ジャンル ― 叙事詩（発表者二名）
- ・口承ジャンル ― 神話（発表者四名）
- ・口承ジャンル ― 伝説（発表者六名）
- ・口承ジャンル ― ジョーク（発表者三名）
- ・口承ジャンル ― 歌（発表者二名）
- ・口承ジャンル ― 超自然的体験者の語り（発表者二名）
- ・口承ジャンル ― 魔法（発表者四名）
- ・地域固有のジャンル ― 地域固有の宗教（発表者二〇名）
- ・遺産と政治（発表者一〇名）
- ・語られたジェンダー（発表者七名）
- ・コミュニティとコミュニケーション（発表者六名）
- ・理論と方法（発表者二十七名）
- ・ことわざ（発表者五名）
- ・祭りと儀式（発表者六名）
- ・場と空間（発表者六名）
- ・社会主義とポスト社会主義（発表者六名）
- ・伝説とパフォーマンズ（発表者七名）
- ・コンピューターを通じたコミュニケーションとデータベース（発表者十六名）
- ・移住および移住ユダヤ人（発表者六名）

・語られた歴史（発表者十三名）

・自然と体験（発表者四名）

・セラピーと死（発表者七名）

・文芸理論（発表者二名）

・ワークショップ「エストニアの説話『飛び去った湖』」

・ワークショップ「コンピューターを通じたコミュニケーション

ン ― どういう仕組み？」（四名）

「口承ジャンル」や「理論と方法」が充実しているのは当然のこととして、今回もコンピューターメディアへの関心が高かったと言える。また「社会主義とポスト社会主義」など、開催地がエストニアであることを反映した発表も見られた。インターネット普及による急速なグローバル化の時代にあつて、口承という分野に大きな影響がでているのは、世界的な傾向である。そうした中、たとえば、インドール・レヴィン氏は、こうしたグローバルイズムの時代だからこそ全世界的な資料体系の構築をよびかけた。また、ワークショップでは、ロルフ・ヴィルヘルム・ブレードニヒ氏がインターネット上でどのように「笑いが扱われ、それがどのような広がりを見せているかを紹介するなど、ベテランがこのメディアにさまざまなチャンスを見いだしているのが印象的であつた。また、その一方でコンピューターなどの影響を受けていないような地域の語りを調査したのも、この時代にあつて、逆に強いコントラストを見せていた。

たとえば、イヴァンチッチ・クティン氏の発表では、数人の参加者の中で語りが行われるときの役割分担、「話を促す人」「語る人」「相づちを打つ人」「誉める人」などに注目し、どのように語りが行われるかを詳しく分析したケーススタディーが報告され、興味深かった。

日本からは、大野寿子「森——グリム兄弟の結晶化されたイデー」、小澤俊夫「日本におけるマックス・リュティの理論」、小林文彦「自然の中の禁じられた恋——口承文芸構造に関する日本の『動物女房譚』の探求」、梅内幸信「グリムのふたつのメルヒェンに見る文化的な推移について」、中山淳子「ちりめん本」木版画付き日本の民間メルヒェンと詩」、間宮史子「日本昔話における異界」の六発表があった。当学会のメンバーである小澤氏の発表は、日本の昔話にもリュティ理論があてはまること、そして氏がリュティ理論の普及に努めていることが報告された。イシドール・レヴィン氏からは、リュティ理論が日本で大切に扱つかわれている研究のあり方に賞賛の言葉があった。また間宮氏は日本の昔話において、異界がどのように捉えられる、どのようなイメージで語られているかを分析し報告した。ルース・ボティックハイマー氏からは、非常に興味深いとのコメントがあった。当学会以外の参加者にも質の高いものがあり、私が見ることができた範囲では、イスラエルから参加の小林氏の発表に対しては、ザビーネ・ヴィンカー、ピーフォー氏から国際カタログATUを利用した比較研究のひとつの見本である

というコメントがあった他、活発に質問が向けられていた。メルヒェンの森に注目し、書き換えや様々な資料を通してグリムの自然観を探った大野氏の発表についても、誠実な研究であるという評価が向けられていた。

なお、インターネットで、<http://www.folklore.jp/ishr/>にアクセスすると、開会記念講演および全体会七発表（計八時間）を全てビデオで見ることができるとある。また、発表要旨も全て掲載されている。プログラムはhttp://www.folklore.jp/ishr/prel_program.htmlにあるので、発表要旨とあわせて見れば、大会のより詳しい内容がわかる。大会中の写真も多数掲載されており、大会の雰囲気を知ることができる。

大会最終日には、総会があり、二〇〇九年の大会会場がギリシアのアテネに、また二〇〇七年の中間大会がアルゼンチンのサンタローザに決まった。新会長として、タルトゥウ大学教授ユーロ・ヴルク氏が選ばれた。また、エグゼクティブ委員会（運営委員会）の委員として、他地域の委員とともに、アジアからは間宮史子氏を選出された。

（かとう・こうぎ／学習院大学）